

日本語概説

崔春基 卢友培 编著

きぐげござじずぜぞだ
よらりるれろわゐうる
ひふへほまみむめもや
せそたちつてとなにぬ
あいうえおかきくけ



旅游教育出版社

日 本 語 概 說

崔春基 盧友絡 編著

旅游教育出版社

(京)新登字168号

日 本 语 概 说

崔春基 卢友络 编著

*

旅游教育出版社出版

(北京市朝阳区定福庄1号)

三河印刷二分厂印刷

新华书店北京发行所经销

*

开本：850×1168毫米1/32 印张：9.375 千字：200

1992年11月第1版 1992年11月第1次印刷

印数：1—6000册 定价：2.25元(课)

ISBN7-5637-0191-5/H·048

はしがき

「日本語概説」は大学で日本語を専攻している高学年の学生が日本語についての一般的な知識を得るために講義用の教科書として編集したが、日本語教師の参考書として使用していただけるよう配慮した。

本書は、音声、文字、語彙、文法の四章から成っており、学習者の習得を助けるため各章にそれぞれ練習問題をつけた。各章は若干の項目に分けられるが、できるだけ最新の知識や研究成果を取り入れるよう努め、また、各章は日本語学の一つの分野として扱うこともできる。

本書は、一年間、週2時間、講義時間数約72時間で終了できるよう編集した。

本書に引用した例文と諸家の研究成果は、いちいち断わることはしなかったが、中日両国の学者には多くの恩恵を賜わった。特に、黒竜江大学劉躍武教授、北京大学徐昌華教授の教示を賜わり、ここに深く謝意を表したい。

何分この種の教科書は編者の手に余る範囲の内容なので、不備な点も多いと思う。読者諸氏からの御教示、御叱責をお願いしたい。

編者

1989年4月

序 章

(一) 世界の言語

世界中にどれぐらいの言語があるかは、未だに定かでない。それは世界に調査不能な未開地があることや、方言なのか異質の言語なのかその認定に困ること等があるからである。フランスの学士院の推定によると、2796種もあるそうだが、それには現在使われていない言語も含まれているので、現在使用中の言語はそれより少ないとみるのが妥当であろう。しかし、現在世界中には約2500ぐらいの言語が使われているといわれている。

言語の中には、少数の一種族だけの公用語として使われているもの（例えば、インデアン語、アイヌ語など）もあれば、多数の国や民族の公用語として使われているものもある。そのうち最も多くの使用者を持っているのは中国語で、約11億人、その次が英語で、約6億人、その次はロシア語で、約2億6千万人である。日本語は単一民族語ではあるが、その使用人口は約1億2千万人ともいわれ、現在国際語になりつつあるといわれている。世界で最も広く共通語として使われているのは英語である。

一國に一つの言語しかなければ理想的でいいが、世界には、

二つ以上の言語を公用語として使っている国もかなりある。その場合その公用語をその国家の正式な言語という意味で、国家語或は国語ということもある。従って、一国が二つ以上の国語をもつこともある。例えば、スイスでは、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語（ラテン語の方言）の四つの言語が国語となっている。ベルギーでも、フランス語、フラマン語（オランダ語の方言）が公用語になっているが、ドイツ語も使われているといわれている。それとは反対に、二つ以上の国或は民族が、一つの言語を使うこともあるが、その典型が英語とスペイン語である。英語は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド等で使われており、スペイン語は、スペイン、アルゼンチン、ボリビア、チリ、コロンビア、ペルー、メキシコ、キューバー、パナマ等中南米の二十数か国で使われているといわれている。

（二）言語の機能

（1）思考性

私たちは普通言語を使ってものを考えるが、「はてな？」、「こうかな？」、「こうだ」、「いつもこうか？」、「やっぱりこうだ」のような過程で言葉を使ってものを考えることもある。

（2）伝達性

私たちは言語によって思想、感情、意志等を人に伝えたり、伝えられたりする場合は、他の手段による場合より多い。

（3）表現性

私たちは言語を使って、感情や肉体的感覚を表現する。聞き手がそばにいてもいなくても、奇麗なものをみれば「奇麗」などというし、痛い目に会えば「痛い」などということもある。また、私たちは優れた話をきいて感動し、優れた思想、学問、

作品などに接して感動することもある。

(4) 交際性

私たちは言語を使って、人間関係を改善していく。「御元気ですか」といわれて、風邪を引いていても「御陰様で」と言うこともある。

(5) 創造性

私たちは言語を通して独自の思想や意見や体験を表現することによって、自分の考えを明確にし、自己を反省し、自己の完成に努力する。

(6) 伝統性

私たちは言語を通して貴重な文化遺産を伝承していく。

(三) 言語の種類

(1) 孤立語 (位置語)

孤立語は、言語の形態的分類の一つで、単語が語形変化せず (語尾変化や活用がない)、主として語順や、形式的な単語との組み合わせによって文法的な機能が果たされる構造の言語を言う。中国語、ビルマ語などがそれである。

(2) 屈折語 (曲折語)

主として単語語形変化により、性、数、格など文法上の関係が示される性質の言語のことを言うが、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などがそれである。

(3) 膠着語 (付着語)

単語に、それ自身では独立して使われない別の単語が付着して文法的機能が果たされる構造の言語のことを言うが、日本語、朝鮮語、ハンガリー語などがそれである

(4) 集合語 (括合語)

文を構成するあらゆる要素が、固く結合して一つの語を成

し、またその語が一つの文と見なされるような言語のことを集合語という。アイヌ語、エスキモー語などがそれである。

(四) 日本語の特徴

ここで言う日本語の特徴は、日本語以外の言語には全然見当たらないものを指すのではなく、相対的にみて特徴的と思われるものである。

(1) 日本語は、音節の数が少なく、構造的にも単純で、大体一子音プラス一母音から成る開音節である。

(2) ン、ツの様な特殊な音節があり、音節の最初に二つ以上の子音が並ばない。

(3) 現代日本語には母音が五つしかなく(英語は12)、子音も他の言語より少ないほうで、21しかない(英語は31)。

(4) アクセントは、英語、フランス語、ドイツ語のような音の強弱によるアクセントではなく、音の高低によるアクセントであるが、中国語と違って、音節の中には音の昇降がなく、普通音節と音節の境目で音の昇降が行なわれる。

(5) 音節のなかでは音の昇降が行なわれないのと、各音節の音の長さが同じであることは、中国語の音節と目だって違う点である。

(6) 語彙は、自立語と付属語(助詞、助動詞など)に分けられ、文法上の働きはほとんど付属語が担い、それらは重ねて使うこともできる。

(7) 名詞は、性、数、格の観念を表わさず、動詞との対応関係も、性、数、格による対応はしないが、動詞の卑尊の差による対応はみられる。

(8) 有情物と非情物はしばしば文法上異なる取扱を受ける。

(9) 日本語は、第二人称を呼称に用いることもある。

(10) 格は助詞を付けて表わすため文の成分の位置は中国語より自由がきく。しかし、修飾語は非修飾語に先立ち、補足語は非補足語に先立ち、接続語は非接続語に先立ち、題目語は叙述語に先立つ。

(11) 日本語は中国語より名詞文のほうが動詞文より多く、省略文も中国語より多い。

(12) 日本語は中国語より男女の言葉の違い、文章語と話言葉の違いが目立つ。

(13) 日本語表記に使う漢字は、読み方はもちろん意味も中国の漢字と違うものが多い。

目 次

序章

- (一) 世界の言語……………(1)
- (二) 言語の機能……………(2)
- (三) 言語の種類……………(3)
- (四) 日本語の特徴……………(4)

第一章 音声と音韻

- 第一節 音声……………(1)
 - (一) 音声とは……………(1)
 - (二) 音声器官……………(3)
 - (三) 音節……………(5)
 - (四) 単音……………(9)
- 第二節 音韻……………(16)
 - (一) 音声と音韻……………(16)
 - (二) 日本語の音韻論的単位……………(18)
 - (三) 日本語の音韻的特徴……………(24)
- 第三節 音節の結合……………(29)
 - (一) 音節結合の意義……………(29)
 - (二) 語音変化……………(31)
- 第四節 アクセント……………(35)
 - (一) 語アクセント……………(35)
 - (二) 日本語のアクセント型の体系……………(37)

(三) 日本語のアクセントの特徴……………	(39)
第五節 イントネーションとプロミネンス……………	(42)
(一) イントネーション……………	(42)
(二) プロミネンス……………	(44)
第一章 練習問題……………	(46)
第二章 文字	
第一節 文字……………	(48)
(一) 文字……………	(48)
(二) 文字の種類……………	(49)
(三) 文字の役割……………	(51)
(四) 日本の文字……………	(53)
第二節 漢字……………	(53)
(一) 漢字の構造……………	(54)
(二) 音と訓……………	(57)
(三) 和製漢字……………	(60)
(四) 偏旁冠脚……………	(61)
第三節 仮名……………	(65)
(一) 万葉仮名……………	(65)
(二) 平仮名……………	(66)
(三) 片仮名……………	(67)
(四) 仮名遣い……………	(69)
(五) ローマ字……………	(73)
第二章 練習問題……………	(76)
第三章 語彙	
第一節 語彙と語彙論……………	(78)
(一) 語彙……………	(78)
(二) 語彙論……………	(80)
第二節 語構成……………	(82)

(一) 語構成	(82)
(二) 語基の作られ方	(86)
(三) 派生語の作られ方	(87)
(四) 複合語の造られ方	(96)
(五) 転成語	(102)
(六) 省略語	(107)
第三節 語彙の構成	(109)
(一) 意味による語彙体系	(111)
(二) 形による語彙体系	(119)
第四節 基本語彙	(121)
(一) 語彙の量的側面	(121)
第五節 位相	(129)
(一) 位相	(129)
(二) 表現主体による言葉の違い	(130)
(1) 男性語と女性語	(130)
(2) 方言と共通語	(134)
(三) 表現様式の如何による言葉の違い	(145)
(1) 話し言葉と書き言葉	(145)
(2) 敬語	(148)
(3) 専門語	(153)
第六節 語種	(156)
(一) 和語	(157)
(二) 漢語	(162)
(三) 外来語	(166)
(四) 混種語	(170)
第七節 語彙の変遷	(172)
(一) 語の意味変化	(174)
(二) 語形の変化 (変遷)	(177)

第三章 練習問題	(180)
第四章 文法	
第一節 文法 の概念	(183)
(一) 文法の概念について	(183)
(二) 主要な日本文法学説	(185)
(三) 文法の部門	(188)
(四) 文法の単位	(189)
第二節 文章論 と談話	(190)
(一) 文章論	(190)
(二) 談話	(192)
第三節 構文論	(196)
(一) 文の構造とその成分	(197)
(二) 述語・独立語	(199)
(三) 中止法・接続法	(201)
(四) 修飾語	(203)
(五) 接続語	(207)
(六) 並立語	(209)
(七) 主語	(210)
(八) 構文上注意すべき事項	(212)
(1) 格と格助詞	(212)
(2) 主題と主語	(214)
(3) 文節と連文節	(216)
(九) 文の構造	(218)
第四節 品詞論	(223)
(一) 品詞分類	(224)
(二) 名詞	(227)
(三) 動詞	(230)
(1) テンス	(233)

(2) ムード	(236)
(3) ブォイス	(239)
(4) アスペクト	(245)
(四) 形容詞	(252)
(五) 形容動詞	(254)
(六) 連体詞	(255)
(七) 副詞	(256)
(八) 接続詞	(258)
(九) 感動詞	(260)
(十) 助動詞	(261)
(十一) 補助動詞	(265)
○やりもらい	(266)
(十二) 助詞	(271)
第四章 練習問題	(277)
引用文献	(282)

第一章 音声と音韻

第一節 音 声

(一) 音声とは

人間は、思想、感情、意志などを伝達する場合、主として言葉を用いるが、言葉による伝達は、音声または文字を介して行なわれる。この音声と文字を比較するとき、より基本的なものは音声であって文字ではない。文字はあくまで音声を記号化したもので第二義的な手段である。このように音声は、人間が言葉によって思想、感情、意志などを伝達する場合、第一義的な働きをするものであるため、日本語を習う場合でも真っ先に触れるもので、その本質、その各相をはっきり認識することは日本語学習を助け、日本語を研究する上でも大切なことである。

われわれは、毎日無数の「音」に囲まれて生活している。ノックの「音」、授業の始まるベルの「音」、先生の講義の「音（声）」、だれかが、静かにしろという意味で発する「シーツ」という「音」、虫の鳴く「音」、だれかが「今日は」と挨拶する「音（声）」、自動車の走る「音」、誰かが何かを示唆して「ごほん」と咳払いをする「音」などの音はよく聴く音であるが、これらは3種類に分けられる。①先生の講義の「音」、だれかが「今日は」と挨拶する「音」、②静かにしろという意

味で「シーツという「音」、何かを示唆して「ごほん」と咳払いする「音」、③ 授業の始まるベルの「音」、虫の鳴く「音」、自動車の走る「音」、ノックする「音」。これら3種類の「音」は、それぞれ次のような特徴がみられる。①は、人間が、コミュニケーション（意志の伝達）のために、音声器官を使って発した「音」であり、②も、人間が、コミュニケーション（意志の伝達）のために、音声器官を使って発した音である。しかし、①と②は少し違う。①は「こ、ん、に、ち・・・」のように音の分節ができるのに、②は「シーツ」「ごほん」と文字で表記はしてあるが、実際の音は①のように分節することはできない。③は、②とも違って、人間が発した音でないものもあり、人間がたてた音ではあるが、音声器官を使って発した音ではないものもある。このようにわれわれの周囲には色々な「音」があるが、われわれはそれらを種類分けすることもできる。このように分けた種類のうち①と②のようなものを音声という。つまり、人間が、コミュニケーション（伝達）のために、音声器官を使って発する「音」を音声というのである。

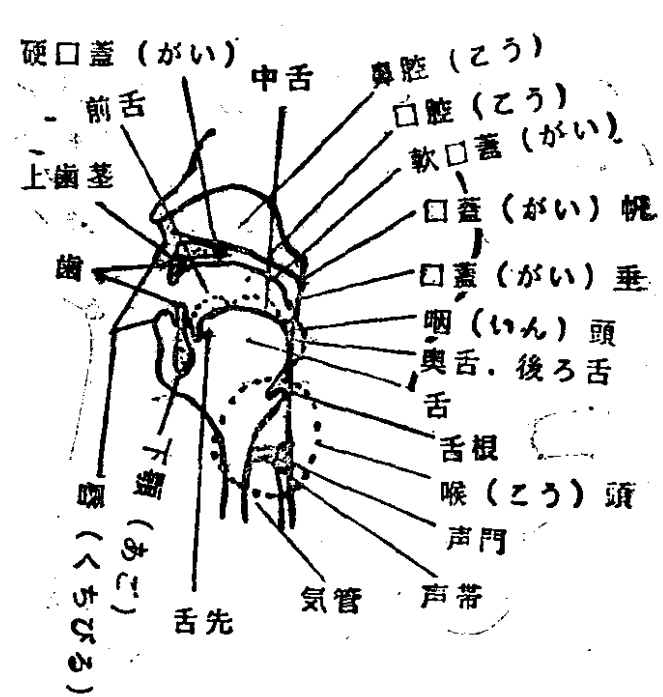
音声には、①のように分節出来る音声もあり、②のように分節出来ない音声もあるが、①のように分節出来る音声を言語音といい、②のように分節出来ない音声を非言語音または表情音という。そして、音声学では、①のような言語音に属する音声のみを研究対象とし、②のような非言語音に属する音声は研究対象にしないのが普通である。

このような音声も物理的現象としては表情音や、③と同じくただの音響の一種であり、聞き手の耳に音波として伝わり、一瞬にして消えてしまう。

なお、言葉（音声言語）には、大まかに言って意義と音声の両面がある。例えば、「ラクダ」という言葉は、音声記号で書

けば、[rakuda] で表わすことのできる音を備えているが、これが音声である。一方「ラクダ」はわれわれに首と足が長くて、背中に二つのこぶのある大きな動物を思い起こさせる。これが言葉のもつ意義である。このように音声言語には音声と意義の二つの側面がある。ところが、われわれにとって、この二つの側面のうちどちらがより直接的であるかといえは、それは音声の面である。われわれは全く知らない外国語をきいて、音

としては捕らえられるが、意味はさっぱり分からないという経験をするが、それは音声の面がより直接的であるということの意味する。しかし、この音声の面がより直接的だということは、言葉を把握するとき意義より音声が大切だという意味



ではない。ただ言葉を捕らえるとき、真っ先に飛び込んでくるのは音声であり、その音声をとらえてはじめて意義というものを感じ取るということである。少なくとも言葉をとらえる第一段階においては、音声の面がより直接的である。したがって、聴いて理解し、口頭で表現することを外国語学習の目的とする人は、これをいい加減に扱うことはできない。

(二) 音声器官

音声器官は、発音器官、調音器官などともいわれ、鼻、鼻腔、唇、口腔、歯、歯茎、舌、硬口蓋、軟口蓋、咽頭、喉頭、声帯、